

想



随

三十年前の小函

村上 一光

木彫りの小函を、ふいと私の前に差し出したのは、久しぶりに訪ねてきた東京の妹であった。「これ、覚えている？」「ずっと昔に、私に彫ってくれたものよ。」「ね、いゝでしょう、私、大事にしていたのよ」と、妹は掌の上に載せて撫でながら私に渡した。

それは妹が結婚する前に、私が紅タプの厚板を削り抜いて宝石箱を作ったものであった。かれこれ、三十年近く昔のことである。妹の言葉通り、大事にされてきた色艶が、三十年の歳月と共に

に、その小函をいゝ味わいにしていた。その小函を受け取って撫でさすっているうち、歳月のフィルムは音を立て、捲き戻されていった。小函の中から、いくつかの思い出が立ち昇ってくるのであった。

人吉市鍛冶屋町で「ルワール」という小さな民芸店をやっていたとき、毎朝、通りがりに店を覗いてゆく娘さんがあった。殊の外、箱が好きで、いくつもいくつも、硯箱や筆箱や小函など、私の作ったものを買ってくれた。美しいものを集めて見ていると心が和むわ、とその人が言う。何とも言えない情緒が小柄で色白の和服姿にあふれていた。何でも病気の父親の温泉療養に付き添って、萩市から来ているとのことであったが、その人が不意に別れを告げにきたとき、折悪しく私は一日不在で会えなかった。暫らく私の帰りを待っていたその人は、私が彫っていた木彫の姫鏡を記念にどうでも譲って下さい、と言っただけで、買っただけだということ。父は、本人が留守だからと渋ったが、懇願に負けた。すぐ、手紙が来て過分な礼金が同封され、丁寧な文面には、私この鏡一生離しません、とあった。福田波津江という名もそのとき

知った。それから間もなく、私たちも又、そこを立ち退かせられて、駒井田町へと移った。

そこは下駄工場の倉庫を二つに仕切ったもので、タタミの代りにゴザを敷き障子もなく入口の土間で炊事をするのである。その鎌倉彫りを請け負ったから、家賃が節約できるという理由で移ったのだが、佻びしいものであった。けれども実際は定住する家もない引揚者の私たちは、それでもホッとした。

隣りは職人の父娘二人暮らしであった。娘さんとは朝夕ちょっと顔を合わせ、短い会話を交したが、その外は殆んど、ひっそりと部屋にいるようであった。ある日突然、思いつめた顔で、一生の思い出にします。小函を彫って下さい、と、頼むのである。唐突であったけれども、私の胸にひびくものがあった。彫り上げた小函を抱いて何度も礼を言った。日蔭の花のようなその人は間もなく鹿児島へと去っていった。

三十年たって、あの小函と女人たちはどうなつたろう。妹は、近く再婚するのである。

(木彫家)

雪の天草灘

藤坂 信子

きのうは仏蔵寺から彼岸会の案内が届いた。私たちは人も知る再婚同志で互いに相手をなくしているからこうしたお知らせはずしんとくる。私はキリスト教徒だが、日本人の血は争えず、昔からこの国で人々の魂を養ってきた仏教には尊敬と親しみを持っている。まして家の中で仏さんのところで想っている人がいたら、あだやおろそかには出来ない。高千穂さんにごぶさたを詫びねばと考える。

さて、今日は彼岸について書こうというのではない。彼岸近くなるとうきよたもので暑さにはうだつたことや寒さにちぢみ上つたことはだんだん思い出さなくなると。彼岸の何だかとうとした気が湿祭の境地に近いのかも知れないが私は眠りこもとうとする記憶を叱咤激励して彼岸の天草を書こうと思う。

今年は概して暖冬だったが時々体のしんがずんずんするような寒い日があった。主人と私が天草に渡った一月末日と二月一日の両日は、まだ足袋をはいた

ことがないといっていた富岡は岡野屋の老女主人が足袋を出したくらい寒い寒波襲来で灰色の海には雪が舞った。

一泊目は下田の望洋閣だったが一晩中はげしく磯に打ちつける波の音がつゞいた。私は天草の景色が好きで時々訪ねるのを楽しみの一つに数えているがこんな不きげんな海は始めてだった。深夜、カーテンを細目にあけてすぐ下の海を覗くと騒いでいる真っ黒い海があった。まるで牙をむき出したようにあちこちで白い波がしぶきを上げる。じっと見ていると自分の体がだれとも知らぬ者に持ち上げられて暗い沖の方へ連れ去られるような気がしてくる。だれとも知れぬ者とは多分、あの海坊主だ。

翌日は雪に打たれながら大江の白い天主堂に上り冷たく固いコンクリートの床に立って開かない礼拝堂を思い、その中でじっと寒気に耐えている聖像に祈った。キリエ・エレイン。主よ憐み給え。この私を。この私が髓から侵されている人間という病いの総体を。

羊角湾も灰色だった。崎津の教会は一層灰色だった。雪は灰色の中に声をあげるように降りつゞいた。ようやく、よろけるように走ってきたバスに乗り込んで、うねっている灰色の海と雪の景色は変らなかつた。青くスカッと晴れた天草

鶯の木

石田 比呂志

灘を見たいと思つたのは他所者の勝手だつた。海風に棕櫚の木の葉がそよぎ海がキラキラ光って笑う、陽気な夏の日の天草灘も真実なら、まるで神経痛に悩んでいるようにふさぎ込んだ冬のこの景色も真実だ。暑さ寒さに表情を変える海に向き合い苦菜を共にしてこそ土地の人間はパツチリでき上って行く。二泊目の岡野屋は林美美子が泊って有名になつた宿。雪と風はあい変らず雨戸をたたき続けたが天草育ちの若い奥さんはために働き海の荒れなど気にもとめなかつた。

(詩人)

今度引越した家の隣りの庭に大きな鶯(もち)の木があつて、まっ赤な実をつけている。それを見て家人が「あれは、南天ですか」と聞く。「バカー」、私は呆れて家人の顔を振り返つた。いくら植物に疎いといふ条こんな大木の南天があつてたまるものか。鶯といへば、子供の頃この木の皮で作つた鳥籠で目白をとつた。今の子供はどうだろうか。椿の枝に鳥籠を塗り、それを青竹の先に結びつ

けて、雪のチラチラする二月の山へ出かけ、目白の通り路と覚しい雑木林に立てて近くの藪にひそむ。すると椿の花蜜に誘われた目白の一群がやって来て枝にとまる。鳥籠に足をとられた目白はくるくると一回転して逆さに枝にぶらさがる。そこを引きおろして用意の籠に入れる。一度に二羽三羽かかることもある。ペテラの子になると四の目白を持つているからもつとたくさんとれる。一日足を棒にして一羽もとれないこともある。今の子は、多分こんな素朴な遊びを知らない。家人も子供の頃、そんな経験が無い。知つていれば植物音痴といえども鶯の木を南天と間違える筈はなかつた。

夏休みに都会から田舎に里帰りした子が、近所の子からカブト虫を貰って「これ、いくら」と金を払おうとしたそう。田舎の子がこれにはびっくりした。都会の子はカブト虫が山野にふんだんに無料で飛びまわっているものとは知らなかつたのである。私は、この話を聞いて笑えなかつた。都会の子は自然とのつきあい方を知らなかつたのである。「腕白でもいい、遅く育って欲しい」というテレビコマーシャルを私はふつと思ひ出した。あれはもしかしたら自然を破壊して子供達から奪つた大人の後悔の現れかも知れない。私の子供の頃は青白い勉強少

年などは一人もいなかった。みんなまっ黒に日焼けして山野を一日駆けまわつたものだ。それで結構一丁前の大人になつている。日がとつぷり暮れるまで泥んこになつて夕飯の間に合わずに母親を嘆かせたのも今は甘酔っぱい思い出だ。それで通信簿が甲から乙になつても親はさして苦い顔もせず、口やかましく勉強を強制もしなかつた。子供から自然が失くさつたのは生活様式の変化が一つの要因に違いないが、生活様式が単なる文化の軽便に向つて走るなら、人類は自滅の方向にのめりこんでゆく、大仰でなくそう思う。ある火力発電所が、地域住民の反対を押し切つて海を埋め立てて拡張した。それで海水浴場の代りに壮大なプールを作つて子供達を騙した。海という自然の代りにプールという人工を与えて足れりとする大人の思考は、もはや環境破壊に無知な頭脳、経済万能白痴の所業である。こと人間にとどまらない。干潟を埋められた頃、海の鳥達はこの海岸からいなくなつた。魚介がいなくなつたからである。そうした連環性の喪失の中で発電所の大きな煙突は今日もまっ黒い煙を上げていく。鳥や魚や貝がいなくなつたという事は、同時に、もっと大切な何かがある。大人は、そこに気がつかない。

(歌人)